

## キャリア教育に関する理論基盤についての一考察

### —淘汰の要因としての「仕事」と育成する資質としての「交換力」—

鎌水 浩 千葉県栄町立栄中学校

#### 要旨

キャリア教育は、国の推進もあり各学校段階において積極的に取り入れられている。しかし、望ましい勤労観、職業観を養ったところで、就職超氷河期やワーキング・プアに代表されるような現在の厳しい経済情勢の中で、それが実際にどの程度役に立つのか、といった根本的な疑問も持たれている。本研究では、経済情勢の行き詰まりを、近代以降の生産の集中、拡大路線が富の蓄積と市場の飽和によって破綻しつつあることのあらわれと見なし、人間が働くことを意図的に行う生産活動及び生存に必要な行動と定義した上で、先史時代から近代までの人間にとっての働くことや仕事の特色を次のように分析した。一つは食料資源の確保といった生きていく上での基本的な部分であり、もう一つは他の人々を征服するための道具づくりである。その結果として、生産の集中と大規模化が起こったのである。このことから考えると、行き詰まりを打開するには、大量生産型の生産スタイルを修正し、技術力を保ちながら生産の分散化と小規模化を図ることが必要となるだろう。そのためには、生産したものを他者に提供する作り手として高潔な倫理観や道徳性が必須となる。こうした倫理性も含んだ高度な生産能力を「交換力」と位置付けた。他者を出し抜き、征服するための道具づくりから、他者に感謝されるものづくりを基本とするわけである。この「交換力」養っていくのが、キャリア教育の役割なのである。

【キーワード】 生産の集中と大規模化 生産の分散化と小規模化 淘汰と征服の要因としての仕事 互酬 交換力

#### 研究の目的

2010年度末卒業を予定している大学生の2010年12月1日時点の就職内定率が68.8%と、調査が始まった1996年以降で最低となったことが文部科学省と厚生労働省の調査で分かった<sup>1</sup>。厳しい経済情勢の下、学卒者の就職は就職氷河期といわれた2000年以上の就職超氷河期にあることが確認されることになった。児童生徒に望ましい勤労観、職業観を育てることをねらいとするキャリア教育<sup>2</sup>は、文部科学省の積極的な推進<sup>3</sup>によって、職場体験やインターンシップを中心に小学校から高校まで浸透するようになったが<sup>4</sup>、このような経済情勢に対してはただ手をこまねいているしかないのが実情である。学校現場としては定められた教育課程をこなし、企業からの求人を待つしかないというわけである。このようなことから、いわば理念型のキャリア教育観に対して、その効果に疑問を持つ声も学校現場にあるのも事実である。単に社会で働いていく際の心構えを教えるといったことだけでなく、仕事を創出していくことにつながるような実効性のある新たなキャリア教育象が求められていくことになるだろう。

端的に言って現在の経済の行き詰まりは近代以降の生産の集中、拡大路線が富の蓄積と市場の飽和によって破綻しつつあることのあらわれであろう。そうであるならばこの行き詰まりを打開していくには単に経済政策によるだけでなく、人間と社会そのものを抜本的に見直し、新たな展望を切り開いていくことが必要なのではないかと思われる。この点において人間づくりを行う教育には大きな役割があるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、こうした視点からキャリア教育を取り上げ、大きな役割を持った分野として描いていく土台づくりを試みたい。そのためには、まず人間にとって働くこと、仕事とはいったいどのような意味があるのか、ということについて原点に立ち返って確認してみることから始めたいと思う。その上で、これからの社会において人間はどのように働いていくべきなのか、そしてそれについて教育はどのような役割を果たすべきなのかを追究していきたい。

考察する手順としては、まず働くことや仕事を人間が意図的に行う生産活動及び生存に必要な行動と定義する。そしてその仕事を先史時代から現代まで時代を区切りながら分析を行う。これによって導かれる働くことや仕事の人間にとっての意味と特徴を踏まえて、今後必要となってくるキャリア教育の内容を考えていきたいと思う。

### 働くことはどうとらえられてきたか

生物としての人間を考えてみるならば、食料資源を確保し、外敵から身を守りながら種の存続が確実に図れれば、それで十分なはずである。付加価値の高い製品を大量に生産し、高度な職業形態を形成する必然性がどこにあるのだろうか。それでいて、これだけ高い生産性と莫大な生産量を達成しながら、ホームレスやワーキングプアが現出する社会状況に多くの人々があえいでいる。現在では生存を確保する第一の条件となっている働くことについて考えていくために、文明期以降、働くことはどのようにとらえられてきたのかを、まず見てみたい<sup>5</sup>

往時の人々の考えが記録として残る最古の時代として、古代ギリシャが挙げられる。この時代にあっては、食料生産や家事労働といった生活を支える基本的な労働は卑しい仕事と見なされ、それは奴隷が行うべきものであった。支配層であるギリシャ市民は日常の労働を免れ知的な探究活動をするものとされた。このように汗水たらす労働を下等なものとしみなし忌避する雰囲気はその後も続いたが<sup>6</sup>、宗教革命後プロテスタントの教義が勤労を神聖なもの扱いようになり、禁欲的な勤労が奨励されるようになっていった。このことが資本の蓄積につながりヨーロッパの資本主義の発展につながることになった、ということ周知のように M.ウエーバー (Weber, M) の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で指摘されている通りである<sup>7</sup>。しかし、西洋社会では労働は苦痛なものであり、避けられればそれにこしたことはないという古代からの労働を忌避する雰囲気は残っており、それがたとえば現在の余暇日数の日本との違いにあらわれているといえる。

これに対し東洋では、仏教と儒教の影響が強くあり、特に人が持っている諸能力を良き目的のために提供することを意味する「知識」に大きな意義が与えられていることに特徴がある<sup>8</sup>。このため働くということは誰にも強制されるものではなく、自分の意志で進んで人の役に立つことをするものだ、という考えが浸透した。こうしたことから、たとえば江戸時代では農民に限らず商人、職人、武士も決まった休日を特に設けることもなく、ひたすら仕事に打ち込んでいたこと、また近年でも仕事中毒といわれるほど猛烈に働いていたこともうなずける。

このように働くことは、西洋と東洋ではそのとらえ方の違いがあり、これが現在の国民性や労働の制度等にも少なからず影響している面はある。しかし、そのような労働、勤労観の違いがあるにせよ、現在では労働することによって報酬を得、それによって消費を行い生活をしていくことはあまりにも当然のことである。働くこと、仕事は所与のものであり、事実として所得を得るといふ実効的な感覚以外は、なぜ働くのか、ということ普段から突き詰めて考えることはあまりないであろう。

## 淘汰の要因としての仕事ーホモサピエンス出現までー

働くことの所与性が高いということは、食料を得るといった活動を行ってはいじめて生存が維持できるのであり、何もしなければ死んでしまうという、これもまた当然の成り行きの結果である。生存のための活動が人間にとっては職業であり、働くこととなる。だが、人間は現在、他の生物とは明らかに異なる方法で生存している。ということは、ここに至るまでには、それなりの変遷や過程があったはずである。ここでは、まず文明期よりはるか以前の人類の誕生時から考察をはじめてみたい。ただし、人類の太古の昔の生活の様子を明らかにしていくのはかなり難しい。何十万、何百万年前の様子は発掘される断片的な化石によって推測していくしかない。明らかになるのは当時の人類の骨格であり、そこから推測される身体的な特徴や脳の容量などである。当時の人類が使っていた道具とみなされるものが発掘されるのは、きわめて少数で、しかも人類史でいえば後期からである。まして、生活していた住居の様子などがわかるような遺跡となると、つい数万年前からのものしかない。したがって、考えられる当時の自然条件や人類の身体的特徴から予想するか、さもなくば人類と近縁の現在の類人猿の生活パターンを見て推測するしかない。

人類の祖先が現在のチンパンジーやボノボと分化したのは今から約 700 万年前である。この時期の人類は全ての他のすべての生物同様、全ての活動が命をつないでいくものであり、日々命がけの仕事の連続であったといえるだろう。その活動は端的には食料資源の確保と捕食から身を守ることの二つであった。ここでは食料資源の確保を中心に考察していきたい。分化以前については現在も多種生息している霊長類同様樹上生活であり、主に食料としていたのは果実であった。このため、視覚神経における明るい光を感知する錐体が、それまでの2種類から再び3種類に進化、つまり白黒画像からカラー画像を見ることができるように進化した。この3種類の錐体はそれぞれ青、緑、赤と知覚される光の短波長、中波長、長波長をもっとも吸収しやすいようになっており、これらの感知の組み合わせが人間に様々な色彩を知覚させている。錐体が2種類だったのは人類の祖先ともなる哺乳類が恐竜が跋扈していた長い期間夜行性とならざるを得なかったためである。しかし恐竜の絶滅によって昼間の行動が可能となって樹上で生活するようになり、果実の成熟度、つまり赤を明確に見極める必要上、緑を感知する錐体が生まれ、再び3種類に進化したのである<sup>9</sup>。このことは、人類の食料資源確保に大きく貢献し、現在我々がごく普通に働くことができる基礎能力の一つとなった。

その後、何らかの理由で一部の集団が樹上から地上へと降りることになった。これが人類の祖先である<sup>10</sup>。地上に降りてもその食料資源はそれ以前と同じく果実食が中心で、昆虫なども食していたのではないかと考えられる。こうした生活が長い間続いたわけだが、180 万年ほど前になると、この頃あらわれたホモ・エレクトスによって画期的なことが行われるようになる。それまでに比べると精巧なアシュール型石器といわれる石器の作成である。その一つであるハンド・アックス（握斧）は、その構造から動物の肉を解体し、はぎとっていたと考えられる。ただし、この石器の形状では動物を襲うことは難しいので、まだ狩りの段階ではなく、他の肉食獣が獲物を食べ残した屍肉をあさっていたと考えられている。それにしても、人類がこの段階で肉食を始めるようになったのは非常に重要なことで、今では人間のエネルギーの20%を消費する脳の巨大化に向けての進化が始まったことになる。

しかし、このときの人類全てが肉食を始めたわけではない。集団ごとに様々な戦略をとったと思われる。たとえば、ジンジャーントロプス・ボイセイには、頭頂部にまるでモヒカンのような骨の突起があるが、これは強靱なあごの筋肉を支えるためである。この集団の戦略は硬い野生種植物の根を主食にすることだった。そのため咀嚼する力を補強する必要があったのである<sup>11</sup>。つまり、この時期には、さらなる食料資源確保に迫られていたこと

になる。人口の増加か果実の減少で相対的に食料不足に陥ったにかもしれない。この淘汰圧で様々な生き残りのための戦略をとったのだが、ジンジャントロプス・ボイセイも結局は絶滅している。生き残ったのは肉食をはじめた集団であるホモ・エレクトスだけであった。道具を使うことによってカロリーの高い食料資源を確保できたためである。したがって、人間の活動として道具を使用することと肉食を行うようになったことが、厳しい自然環境に適応し、繁殖を拡大していく大きな要素になったのであり、道具を作成し使用すること、そしてその道具を使って作業することが、人間の仕事としてまず身に付いたといえる<sup>12</sup>。

### 淘汰の要因としての仕事 — 農耕と牧畜開始まで —

石器を使用するようになった人類は、その後はしばらくの間はほとんど道具についての発達は見られず、同じようなものを使用し続けていた。そして今から 20 万年前になると解剖学的に現在の人類と全く同じ形態のホモ・サピエンスがアフリカに出現した。ただし、その後も道具の使用を初めとした生活の様子はあまり変化は見られず、相変わらず単純な石器での屍肉あさりと採集の毎日であったようだ。ところが今から 5 万年前から突如大きな変化が生まれる。現在のところ人間にとって最古の文化といえるものは現在の南アフリカにあるコロンボス洞窟で発見されたオーカーと呼ばれる装飾のあとである<sup>13</sup>。その後、人類は石器や骨角器を急激に発達させ、自ら動物を襲うようになる。つまり狩猟が開始されたのである。これによってより多くの食料資源を確保することができたわけだが、狩猟が成功したのは道具の発達によるものだけではない。むしろそれよりも大きな要素があった。それは言語の使用である。いわゆる言語遺伝子が第 7 染色体の長腕部に存在する FOXP 2 であるということが同定されているが<sup>14</sup>、この遺伝子について変異があったのは、やはり 20 万年前近辺と考えられる。つまり言語能力を獲得したのがホモ・サピエンスだったわけである。言語を駆使することによってより高度なチームプレーと情報の交換をおこなうことができた<sup>15</sup>。これによってそれまでにない人口増加をもたらしたのではないかと考えられる。遺伝子解析によれば 20 万年前にホモ・サピエンスがあらわれた集団は 3 千人程度であったと考えられているが、狩猟の開始によって一気に数万単位にまで増加した可能性がある。この人口増は狩猟対象となる大型動物の減少や絶滅を招き、人類は獲物を求めて 2 度目の出アフリカを果たすことになる。

その後こうした生活が数万年続くことになるが、さかんな狩猟によって各地ともその対象となる大型動物が姿を消すことになってしまった。食料危機が訪れたのである。この対策としてとるべき方法は 2 つしかない。新たな食資源の方法の開発か、人口、生活規模の縮小である。これらの戦略に成功した集団は多くあり、その後も生存を確保することができた。その中でもメソポタミア地域のいわゆる肥沃な三日月地帯では、たまたま栽培に適した麦類が自生していた。また、気性が比較のおとなしい牛や馬などの野生動物が生息していた。これらの偶然の要因により農耕と牧畜が開始され、自ら計画的に食料の生産が行われようになったのである<sup>16</sup>。この時期に活動として人間に身に付いたのは高度な道具の作成と使用、言語を駆使した狩猟及び採集、そして植物の栽培と動物の飼育による食料の生産であり、食料資源の十分な確保の方法の確立である。

### 征服の要因としての仕事 — 現在まで —

以上、先史時代の人類の活動の様子を見てみると、ホモ・サピエンス誕生まではともかく厳しい自然条件への適応、そしてそれ以後は狩猟、採集、そして農耕と牧畜による人工的な食料資源の確保、ということになる。これらは生存にとっての基本の条件である。安

定した生存のためであるなら、これでもう十分であろう。それ以上何かをする必要はないと思われる。しかし、人間は不必要とも思われるさらなる活動を仕事として行うようになる。

人工的な食料の生産は食料の余剰を生み、農耕による定地生活の結果として人口の集中が見られるようになった。そして人々の統制の必要から首長集団そして国家の形成へと発展していったのである。啓蒙思想以来の社会契約説では人々の自由意思を基盤に契約の産物として国家が生まれた、となったとしているが、歴史を見る限りこれは明らかな間違いである。首長集団から国家への発展は契約ではなく征服である。制服された人々多くは男は殺されるか、奴隷となり、若い女性は妻とするために略奪したのである。そのことが古代ギリシャにも色濃く残っていた。こうして、いわゆる4大文明地域を中心に国家が形成されていったわけだが、ここで人間に習得されたのは、それまでに身に付いた能力を基礎とした武器の発達と人々の行政的管理である。

その後、各地で文明、文化が発達していったわけだが、現在のように西欧文明が世界のスタンダードとなる転換期となったのが、15世紀からの大航海時代である。中でも鉄砲という殺傷能力の高い武器の発明がものをいったのである。コロンブスのアメリカ到達以降、スペイン、ポルトガル勢力が南北アメリカに進出した。アメリカ大陸には出アフリカ以降アジア経由で渡った集団が1万1千年前頃からベーリング海峡からアメリカ大陸に渡り、南アメリカ南端にまで達していた。そして各地で狩猟採集の生活を続けていた集団、農耕を始めていた集団が生活しており、中南米には大規模な国家も生まれていた。これらの集団や国家をスペイン、ポルトガル勢力はいとも簡単に征服してしまったのである。それを端的に示すのは、1532年、スペインのピサロがわずか166人で当時現在のペルーを中心にした大国家であったインカ帝国の実に8万人の軍隊を相手に戦い圧勝し、皇帝のアタワルパを捕縛してしまったことであろう。このときのピサロ圧勝の原因はインカ帝国軍が初めて接した12丁の銃と60頭の騎馬、そして殺傷能力の優れた鉄製の剣や槍であった<sup>17</sup>。その後、アメリカ先住民はヨーロッパ人による殺戮とそれを上回るヨーロッパ人がもたらした病原菌<sup>18</sup>によってその多くが滅んでしまった<sup>19</sup>。さらにヨーロッパ人はアジア、アフリカ、太平洋地域に進出しそのほとんどを支配したのである。

この場合の征服を淘汰ということはできない。本来自然淘汰とは遺伝子の変異によって環境に適応し、その変異種が繁殖していくことであり、強い者が弱い者を蹴散らしていくこととは違う。これは社会ダーウィニズムであり、進化学を曲解したものである。しかし、征服によって征服した人間の活動、つまり仕事内容とその結果が世界のスタンダードになったのは間違いない。それは武器のさらなる発達であり、戦いに勝利するための科学技術と諸制度の発達である。具体的な要素として挙げられるのは、硬質化、軽量化、爆発力、動力等であり、その結果として行き着いたのが生産の集中化と大規模化である。つまり、征服や戦いがなければ仕事は高度化しなかったわけである。近代においても戦争によって科学、産業が長足の進歩を遂げたのは事実である。なぜ、人間がこうした方向に進んでしまったのかは明らかになっているとはいえない。考えられるのは、ホモ・サピエンス誕生と狩猟の発達までは人類は常に自分を捕食対象とする猛獣に常に脅かされてきた。これに対処するには、確実に生き延びるための生理的、心理的に緊張感を高める方略としての憎しみや恐れ、そして集団で対処するために共感や同情、喜びといった感情の発達が必要だったのではないかとということである。これが、人類の集団化戦略とあいまり、人間同士でも自集団であれば結束するが、他集団であれば容易に敵視してしまう、内集団外集団偏向を生んでいったのではないかとと思われる。

したがって以上のことから考えると、進化の末にある人間にとって仕事というのは、大別して2つの内容に分けられるとあってよいだろう。1つは、役割を明確化させた集団による食料の確保及び敵から逃れること、また逆に敵を襲うこと。そしてもう1つは、生得

的な面を基盤にした本来身についた能力を他の面に転用するという意味である前適応としての征服のための道具づくりである。そして両者に共通して発達した生産形態としての集中化と大規模化である。

## 生産と交換

こうした特に仕事や職業が征服のための道具作りであるという見方に対しては、あまりに悲観的である、と受け取られるかもしれない。だが、実際に現在の社会状況を見てみると、各企業は生き残りをかけ国内のみならず新興国等の他国の企業と激しく競争している、つまり戦っているのであり、市場を獲得したり食い込めなかった敗者は、負け組となり生活に窮することになるのである。人間の仕事の本質的な特徴を考えれば、これは当然の結果ともいえるだろう。まして、今日ではその特徴を最大限に発揮する「市場原理主義」が大手を振っている。この状況をどう打開していけば良いのだろうか。考えられるのは、食料資源の確保といった基本的な部分はともかく、弊害を生むような面についてはこれまで人類がとってきた方向を見直さなければならないということである。もちろん、人間の本性は変えられないので、それを認めつつ逆を行う工夫をするということである。仕事、職業に即して考えれば、食料生産に関してはそのままとしても、征服のための道具の生産とその結果である生産の大規模化、集中化については、その方向を修正していかなければならないだろう。具体的にはこれまでのような大規模化、集中化ではなく、小規模化、分散化にシフトしていくことになる。全国一律の大規模生産ではなく、地域分散型の小規模生産のスタイルに移行していくことが必要であろう。ただし、全てをそうするわけではなく生活していく上で最低限必要な食料や生活必需品は量の確保がまず優先される。また分散、小規模化が製品の質の低下を招くことになってはならない。したがって、地域の特色を出すという意味でローカルだが、品質は世界と勝負できる、ということになる。モノであれサービスであれ、その品質の高さをここでは「交換力」として位置付けたい。この「交換力」は生産することにおいて、征服の道具からの方向転換を図るものになっていくと思われる。

人間は生産についての技能や知識、つまり生産力を身につけることによって、他の動物とは際立って異なる存在となった。だが、人間が生産活動を大規模化、高度化することができるようになったのは、単に生産力が増したからだけではない。生産物同士の交換を行うようになったからである。生産者としての側面だけの人間であれば、食料と身近な道具を自給自足で生産する程度であったろう。もちろん、人類は700万年前に樹上生活から危険な地上に降りたとき、地上に暮らす他の動物に劣る身体能力のハンデを、集団化戦略によって切り抜けてきたのであり、生産活動も個人単位ではなく集団で行うようになったからこそ、生産量も飛躍的に増加した。だが、個人であれ、集団であれ、ある生産のための作業は、一つかせいぜい数種類の生産物しか生み出さない。熟練した技で卓越したものを生産しようとするならなおさらである。人々が皆同じものだけを生産していたならば、いくら多人数で取り組んでいてもやはり食料と身近なもの程度であったろう。食料生産に余裕ができたことにより、食料以外の様々な異なった道具や装飾品、あるいはサービスを生産するようになり、それらが大規模、複雑に交換するようになったために、多くの物品を手にすることができたのである。

現代の経済活動もまさに交換であり、個人の労働の対価である貨幣を媒介に生活上必要なものや欲しい物品を手に入れているのである。現代の日本においては生産技術や生産規模もこれまでの歴史上ピークに達しているはずである。しかし、各市場は飽和状態になり需要は見込めず中国等の新興国に生産拠点も販路も求めざるを得ない状況になっている。交換活動に不具合が生じている状態と言ってよいだろう。そのためには交換活動を無理や

りにでも行わなければならないのかもしれない。モース (Mauss, M) が「贈与論」で取り上げた北米先住民の伝統儀式である「ポトラッチ (potlatch)」は、各部族の首長たちが各々の地位を誇示するために他の部族首長等を招き富を贈与し合い、時には破壊し合ったという<sup>20</sup>。これは、生産物は退蔵し蓄積するものではなく、交換するもの、商業ベースでいえば流通させるものである、ということを示しているのかもしれない。

この人間が行う交換について重要なことは、単に生産した物品を交換するだけではないということである。相互の利益を拡大し合うということについて、現代社会の諸問題を市場経済がその支配力を失いつつある兆候であると見なしたポランニー (Polanyi, K) は、本来の普遍的な社会である非市場経済社会における社会経済行為のパターンの基礎の一つとして互酬 (reciprocity) を挙げている。互酬とは血縁的關係や友人関係における社会的義務となっている贈与行為であり、ポランニーはそれを支えているのは「どんな社会にも固有のそれなしには社会が成り立たない善意」であり「相互の好意的態度が互酬を伴う」としている<sup>21</sup>。この善意とは利他性による道徳感情であり、好意的態度とはやはり利他行動ということになるだろう。こうしたポランニーの見解に沿って考えるなら、人間社会を発展させてきた大きな要因である経済行為の基盤となるのは本来は個人の他者を思う利他性である。だが、現代社会では経済システムがあまりに巨大化複雑化したものになり、個人の利他性が除外される形となってしまったために、様々な問題が生じているということになるだろう。つまり生産したものを交換し合うということには、道徳感情といった心理的要素が必ず伴うのである。そして、人間にとってこの心理的要素は生活していく中で中心となるものなのである。この意味で交換のない生活は感情のない生活であるということがあえるかもしれない。実際、交換がないということは人との交流がないということになり、そうなればまず人間は平常な状態を保つことはできない。このように交換する際には、そのものの品質や技術力だけでなく、生産する者の道徳性、倫理性も問われることになる。怪しい者が生産したものは信用されないのである。したがって「交換力」には品質の高さを示すだけでなく、生産する者の人間的な道徳性、倫理性も含まれるわけである。ここでさらに重要なのは、生産する人間としての役割意識であろう。生産物を交換していくためには交換に耐えうる高い品質が必要である。高い品質を保証するためには高い技術力の裏づけがなくてはならず、高度な専門性が必要になる。高度な専門性という役割を自分は担っている、という自覚を強く持たなければ倫理性、道徳性は身につけていかないであろう。この点においては、自分の能力を良き目的のために使うという東洋的な伝統を生かしていくということにもなる。こうした「交換力」の視点こそが、征服のための道具づくりとその使用という、この1万年間の人間にとっての働くことや仕事の意味を変換させていく鍵となるものであろう。

しかし、現在のシステムでは「交換力」の高い、つまり高品質で真摯な姿勢を持った生産者であっても、価格競争で敗れば市場から駆逐されてしまう。この実態に対しては、命を保障する食料等の生活必需物資については、たとえばベイシック・インカム (B・I) のように最低保障制度の導入が考えられる<sup>22</sup>。ただし、全くのいわば担保なしではフリーライダーを多く生むことになるので、何かしらの労働の対価としての保障という形にするべきであろう。こうしたシステムを作り上げていく上では、個人個人が生産者としての自覚と誇り、責任感を身につける必要がある。それを担うのがキャリア教育である。

### 「交換力」を養うキャリア教育

現在全国各地で行われているキャリア教育の主な内容は、冒頭でも触れたように実際の職場、職業に直に接することにより、仕事の内容や職業人が仕事に取り組む姿勢などを学ばせ、望ましい勤労観や職業観を育成する職場体験やインターン・シップを行うことが主

流である。このこと自体は、大変有用なものではあるが、これまで述べてきたことを踏まえて、今後必要となってくるキャリア教育の内容を挙げてみたい。

まず、座学として指導、学習していく分野である。3点を挙げる。

- ・職業の意味の理解

職業の意味については、職業を上述してきたように人間の活動としてとらえ、その特色を理解させていくことである。その際には、全ての生産活動を一緒くたにするのではなく、食料の生産とその他の生産とは、別の次元のものであるという意識を持たせる必要がある。食料資源の確保だけは社会政策として最優先しなくてはならない、ということを社会に明確に位置付けていくためである。収入の低下によって食べることに事欠く、といった事態は何としても防いでいかなければならないであろう。

- ・利他行為としての生産活動

生産活動を行うのは、他者に喜んでもらうため、よりよい社会を築いていくためものである、ということを徹底させる。交換によって経済は成り立つわけであるから、結果的に自己利益のみを追求するだけでは、自己の富が増加すれば交換活動が停滞することになる。自己の利益より他者の利益という利他行為に導いていくのである。

- ・生産者としての倫理性、道徳性

そして、生産物を交換していくために必要な倫理性、道徳性の育成である。生産者としての心構えが十分にできていないために、偽装等の安易に利益を得ようとする事件が発生するのである。社会の中で生きていくには信用がいかに大切であるかを徹底して教え込んでいかななくてはならない<sup>23</sup>。仕事の利他性や倫理性、道徳性については東洋の仕事観と一致しており、その伝統を復活、宣揚していくということにもなるだろう。

次に実践活動としての分野について2点挙げる。

- ・体験活動の推進

職業について触れさせ、試行させるということで、現在の職場体験等のことであり、これについては十分実施できている状況である。

- ・生徒の活動を地域で認知する取り組み

問題は試行させた後に、どうするかである。現在はこの段階で終わることが多いため、お客さん気分が終わってしまったり、せっかく良い体験ができたと思ってもその後は進学に追われ、その経験が次につながっていかない場合が多い。各学校段階では中学校後半から高校段階では、実際に何かしらの生産活動を行ってみるべきであろう。その際には企業と連携し、仮想的なものであれ実際の生産であれ、生産者としての実践が必要であろう。そしてその活動に対して地域が評価し、認知していくのである。これにより働くこと、生産していくことの重要性と醍醐味が実感できるであろう<sup>24</sup>。

## 結語

冒頭でも述べたように、なぜ働くのかということについては、あまりにも当たり前のことであり所与性が高いので、結局「金を稼ぐ」といった即物的な答えが頭に浮かびやすくなる。実際今日の社会では、それだけが目的ではない、と心では分かっている生活の上で現金の収入がなければ成り立たず、収入が多くなれば優雅な暮らしができるのが現実なので、まずは「金を稼ぐ」「生活の資を得る」ことがどうしても優先してしまう。しかし、結局は自己の利益を追求するだけでは今日の情勢のように交換が滞り、経済は停滞するのである。自己利益の追求が利益の目減りをもたらすのである。これを防いでいくには、自己の利益を考えるなどというわけではないが、それよりも他者の利益のための仕事、という観念を浸透させていくしかないであろう。これは最終的には人間の意識の問題であり、経



済政策というより教育によって行っていくしかないことである。また、生徒の立場で純粋な心構えで生産活動を行っていくことによって、社会としても純粋な目によって監視され、啓発されていくという雰囲気醸成されていくのではないかと思う。こうした役割を持つキャリア教育は、今後の学校教育の核となっていくとも考えられるだろう。

注

- 1 朝日新聞（朝刊）2010.12.19
- 2 文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるため～」2004.1
- 3 文部科学省「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引 ー児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるためにー」2006.11
- 4 たとえば中学校での職場体験学習が全国で94.1%に達している（国立教育政策研究所（2007）「平成18年度 職場体験・インターンシップ実施状況等調査」
- 5 働くことについては労働、勤労といった用語が日本では混在して使われているが、その意味はそれぞれ微妙に意味合いが異なっている。労働は共産主義、社会主義的な色彩を帯び、低位の階級での活動といった印象がある。これに対して勤労は道徳的な真摯な姿勢を伴う印象がある。ここでは、「働くこと」も含め全て同じ内容を指しているのだが、文脈によってそれぞれの用語使い分ける場合もある。）
- 6 たとえばアレント（Arendt,H）は人間が行うことを、肉体労働を中心にした低位の労働と、物づくりを中心にした中位の仕事、そして言語活動を中心にした活動の3つに分類した（アレント志水速雄訳（2007/1958）『人間の条件』ちくま学芸文庫）。
- 7 ウェーバー（Weber,M）大塚久雄訳（2000/1920）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫
- 8 橋本俊詔（2009）「働くということ」同（編著）『働くことの意味』ミネルヴァ書房 pp.14-15
- 9 3種類の錐体細胞を持っているのは人間と一部の霊長類などだけである。
- 10 地上に降りた理由は、以前は700万年前頃にアフリカ東部の大地溝帯が隆起をはじめ、現在のエチオピア付近が乾燥した気候に変わったことによって森林が失われ、そこに生活していた集団が地上に降りざるを得なかったと、考えられてきた。しかし近年、大地溝帯より西側の現在のチャド付近でアウストラロピテクス期の人類の化石が発見されており、この説は成り立たなくなってしまう。現在では森林と水辺が混在するような場所で生活していたのではないかと推測されているが、なぜそのような場所に降り立ったのかは謎となっている。）
- 11 NHK「地球大進化プロジェクト」（編）（2004）『地球大進化6』NHK出版 pp.50-57
- 12 この屍肉あさり戦略はかなり成功したようで、人口増をもたらし、一部の集団がアフリカを出てアジア方面に進出し、現在の中国、東南アジアにまで達した。だが、出アフリカを果たしたそれらのホモ・エレクトスの集団も、近年化石が発見され大きなニュースとなったインドネシア、フローレス島の「ホモ・フローシエンシス」が1万2千年前まで生息していたのを最後に全て絶滅した。
- 13 Henshilwood,CS. et al. (2002): Emergence of Modern Human Behavior: Middle Stone Age Engravings from South Africa. *Science*, 295, 5558, 1278-1280
- 14 Fisher, S. E., Enard, W., Przeworski, M., Lai, C. S., Wiebe, V., Kitano, T., Monaco, A. P., & Paabo, S. (2002). Molecular evolution of FOXP2, a gene involved in speech and language. *Nature*, 418:869-872.
- 15 因みにホモ・サピエンス出現以前にヨーロッパ方面に渡った集団の子孫であるネアンデルタ

ール人は脳の容量はホモ・サピエンスよりもむしろ大きかったが、喉の発声器官の構造はホモ・サピエンスとは異なっており、人類ほど明確に発音ができなかったと考えられている。そのため高度なコミュニケーションを行うことができず、その後進出してきたホモ・サピエンスに次第に生活範囲が狭められ、ついには3万年前に滅んでしまった。

- 16 これに対し、大型の野生動物の生息数が少なかった地域では人口、生活規模の縮小戦略をとった。たとえばオーストラリア先住民である。
- 17 ダイヤモンド(Diamond,J) 倉骨 彰訳(2010/1997)『銃・病原菌・鉄(上)』草思社 pp.99-108
- 18 主に天然痘とインフルエンザであった。
- 19 たとえばコロンブスをはじめに渡ったイスパニョーラ島(現在のハイチとドミニカ)では先住民は、その後一人も残らず全員が死亡した。
- 20 モース(Mauss,M) 有地 亨訳(2009/1950)『贈与論』勁草書房 pp.107-127
- 21 ポランニー(Polanyi,K) 栗本慎一郎、端信行訳(2004/1966)『経済と文明』ちくま学芸文庫 pp.130-131
- 22 ただし、BIについてはその意義づけをはじめ、方法についても税金から国民に無条件で一律に給付する方式や、還付金方式等、様々な考えがある。
- 23 このことは、大きく報道された大相撲の八百長問題にもそのままあてはまる。スポーツの世界であっても倫理観、道徳性が失われれば、社会の中では交換の対象とはなることができないのである。結局、こうした事態を防いでいくには教育の力しかないのである。
- 24 たとえば鎌水浩(2010)「職業の意義とキャリア教育 —理論的考察と実践」弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要(弘前大学教育学部附属教育実践総合センター)第8号 57-69